

# 幼児の音楽体験と

## 創造的表現

江 波 諄 子



幼児の創造的表現とは、どんなことをいうのでしょうか。こんな疑問を心に抱きながら、幼稚園における幼児の創造的生活を、音楽体験ということを通して、少し観てゆきたいと思えます。

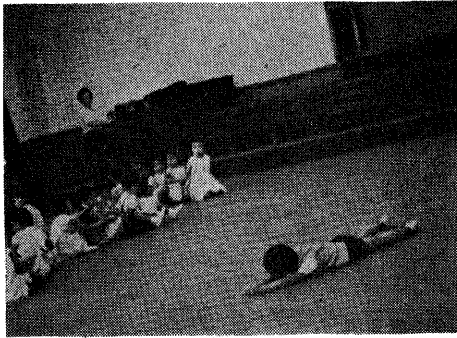
創造性とは、人のために何か新しく、望ましいものを生み出していく性質を意味するとか、それは自己表現の過程であるが、思考の面からいえば、単なる集中的な思考でなく、可能性を広く追求する拡散的思考 (divergent thinking) (教育相談事典) であると、いわれています。

ここでは、音楽という感情体験を通じた創造性ということについて、少し考えてみたいと思いますが、人間の最も大きな喜びは、自分の心の中の情感を感覚によって他の人にもわかるような客観的な実態として、表わすことだといわれています。幼児が音楽やリズムに触れるということは、一つの感情体験 (emotional experience) をしていることだと思えます。

幼児の生活には、そのひとこま、ひとこまに音楽があり、生きたリズムがあります。この自然の中に存在する音楽やリズムに調和できたときに、生活の、遊びの喜びが生まれていくことと思えます。幼児の生活そのものをリズムミカルにし、音への関心の豊かさをつちかうために、音楽的な教育がいかに働いているか、また、音楽以外の生活指導において、どの程度まで音楽的要素が考えられているか、もう一度お茶の水女子大学附属幼稚園の五歳児の生活を通して、観てゆきたいと思えます。

最初に、週一度、遊戯室で行なわれる音楽リズムの指導を、教師の指導からみた音楽リズムと、幼児の体験としてみた音楽リズムの二方面からとに分けて、観てゆきたいと思えます。

②興味のなさそうな幼児を  
とりあげて仲間に入れる



①ピアノにあわせて歩く

## I 音楽リズムの時間

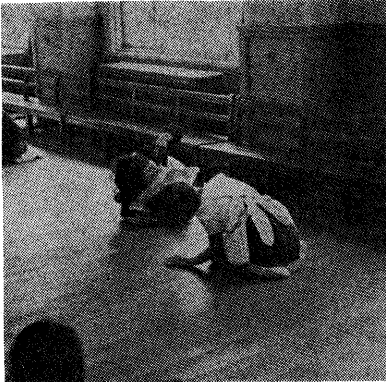
### A 教師の指導からみた音楽リズム

- ①歩く 音楽リズムの時間は遊戯室で教師のピアノにあわせて歩くことから始まります。それまで楽しんでいた各自の遊びをやめて、幼児は、一分間くらい、広い遊戯室をいっばいに歩きます。この間に、すべての幼児を身体的精神的に同じ状態にもってゆき、これから始まる音楽リズムの時間の準備として導入してゆきます。(写真①)
- ②落ちこぼれないように 仲間に入ってこなかったり、興味のなさそうな消極的な幼児をとりあげて最初の段階でこれから始まる楽しい音楽リズムの時間に引き入れてゆきます。(写真②)
- ③体と心の準備 ピアノにあわせて、じょうずに歩けるようになった頃を見計らって身近な題材をとりあげます。ピアノを弾きながらたとえば次のようになります。  
「速足にいったから歩くのがおじょうずになったわね、じゃあきょうもまた速足にゆきましよう。パスの所まで、きのうのように歩いて行きましよう。」
- ④幼児の興味 幼児は現在という中に生きております。幼児が考えられる範囲の過去と未来をとり入れた現在に、表現のものになる材料や話題を選びます。
- ⑤材料 音楽リズムの時間は三十分開程です。この間、教師は途中で幼児の興味や関心が失われぬよう、それぞれに関連のある材料を二十回のいろいろな表現の変化として試みております。そしてその材料は、その場の状態によって変えたり、幼児の意見も入れてつくってゆきます。
- ⑥幼児に適した動き 指導している幼児の年齢と体力によってそれに適した動きを考えます。この年齢の幼児ですと、やさしい材料あるいはゆっくりすぎる指導ですと興味が途

③おもしろい表現をとりあげる



⑤やぎになったり



⑥うさぎになったり



④リズムにのって動く楽しさ

中でとだえて持続しないようです。

⑦表現 このような中で幼児の表現が必ずしもすべて独創的ではありませんが、一人一人の幼児があるときは真剣に、あるときは楽しそうに自信をもって動いております。

教師は模倣性の強い幼児の表現が一つのものにかたまらないよう、おもしろいと思われた表現をいろいろとりあげてゆきます。

(写真③)

### B 幼児の体験としてみた音楽リズム

今度は幼児の側から観てみましょう。

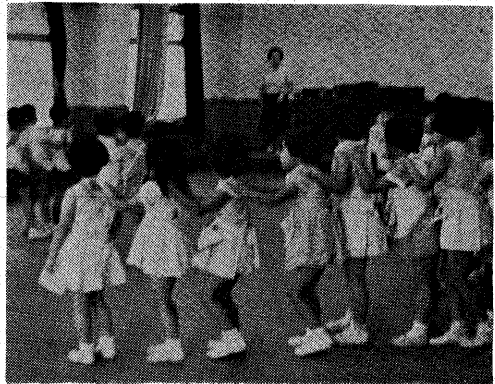
①リズムにのって動く楽しさ まず、幼児はリズムカルな曲にのって、広い遊戯室を自由に動き、快いピアノの曲にあわせて非常に楽しんでいきます。(写真④)

②表現の喜び 教師の暗示とそれにふさわしい曲によって幼児は、ときには動物に、ときには花になって表現する楽しさを味わいます。(写真⑤、⑥)

③友だちとの連帯感 リズムにのって活発に動いたり、表現しているとき、幼児はグループになって行動することが多いようです。



⑧「スキップしましょう」



⑦「バスになりましょう」

## Ⅱ 日常生活場面でみられる幼児の音楽体験

教師が「バスになりましょう」「スキップしましょう」「お休みしましょう」というと、すぐにその場にいあわせた数人でグループをつくりまわります。このグループは流動的なもので、簡単にメンバーの入れかわりが行なわれます。このようにして幼児は同年齢の友だちといっしょに動き、表現するのを非常に好み、楽しんでいくようです。(写真⑦、⑧)

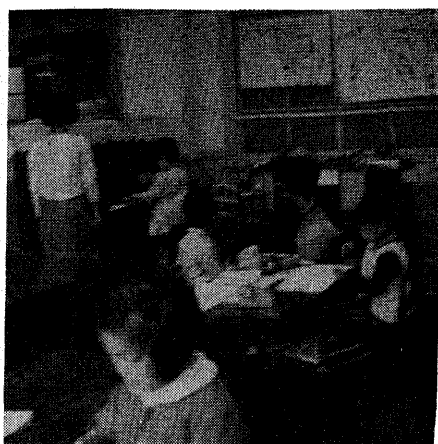
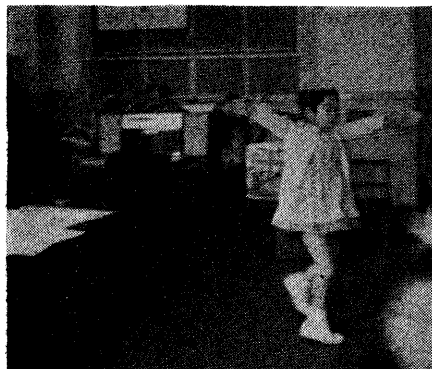
①スキップ 幼児の日常生活を観察してみても、その中に音楽的要素、音楽的体験がいかにたくさん含まれているかに気づきます。廊下では、始終スキップを楽しみむ幼児をみることもできますし、それは幼児のことばの中にもあらわれてきます。

②ブランコ 庭では七月の風をきいて、数人の幼児がブランコを楽しんでいます。一定の大きなリズムに体をまかせてゆれている幼児の顔はともさわかずです。

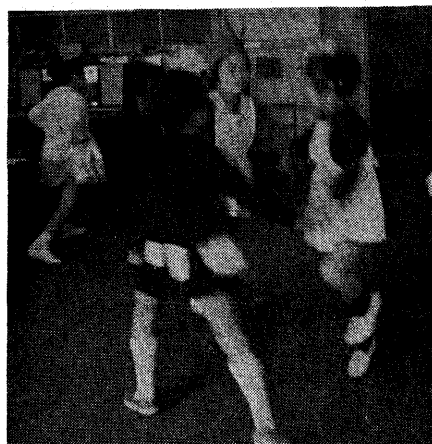
③歌 部屋の中でモールドをつくったちようちようをもつて二人の女児が部屋の中を「ちようちよう」の歌をうたいながらまわっています。絵を描いていた男児の顔にちようちようをどめました。男児は少々邪魔のようでしたが、女児が大きな声でうたうと「あっとまいった」と、自分の頭のちようちようをさしていました。女児の歌声に男児も一時絵を忘れて、ちようちようの世界に入ったようです。

④ピアノ 部屋には、ピアノが一台あります。その近くで絵を描いていたグループも誰かが弾く美しいピアノの音に手を休め、しばらく聴き入っています。(写真⑨)

⑤レコード 部屋では、レコードが流れています。レコードの回りには数人の幼児が集まっています。レコードの曲は「グシコスの郵便馬車」です。蓄音機のおいてあるテーブルには木琴があり一人の幼児がレコードにあわせてたたいています。レコードの音が強くなると木琴を激しく打ち、速くなるとそれにあわせて手を速め、力いっぱい木琴をた



⑨ピアノの音に聴きいる



⑫レコードにあわせて踊る

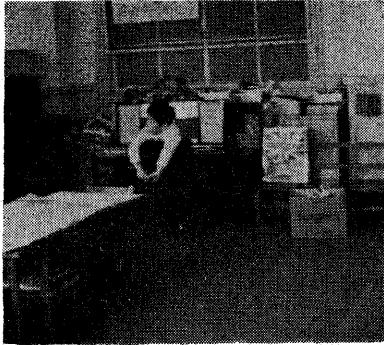


⑩レコードのまわりで遊ぶ

たきます。まるでレコードから聴こえてくる曲を自分で演奏しているかのようです。

この幼児はレコードの曲に心を動かされ、つまり感動したのでしょう。そして、そこから湧き出たエネルギーが、木琴を激しくたたくことにより発散させられて、レコードから流れてくる曲と幼児の心が結びついたのだと思うのです。少なくとも、この瞬間に幼児は幼児なりにこの曲を感じとり、心にわきおこる感動を何らかの手段で表わしているのです。

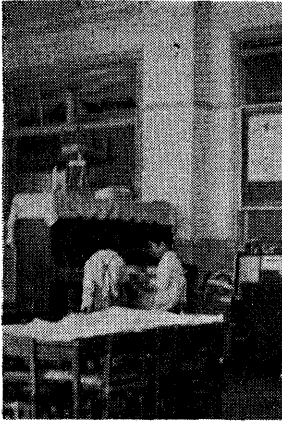
次も一人の幼児の音楽体験の記録です。ピアノとレコードの回りで数人の幼児が遊んでおります。(写真⑩) E子が「エリゼのために」のレコードをかけました。近くのテーブルにいたY子が「もう少し大きい声で」といいました。しばらくみんなそのままの状態でレコードに耳を傾けていましたが急にE子が立ちあがって曲にあわせて踊りだしました。近くにいた二、三の女児も一しよに踊りだしました。(写真⑪、⑫) 曲が終わると二人の女児は庭から誘いに



⑭「せんせい……」



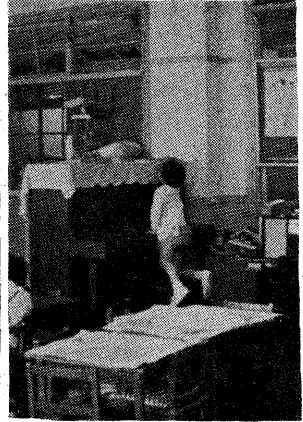
⑬ E子一人でレコードを



⑯二人でピアノをひく



⑰本をひらいて



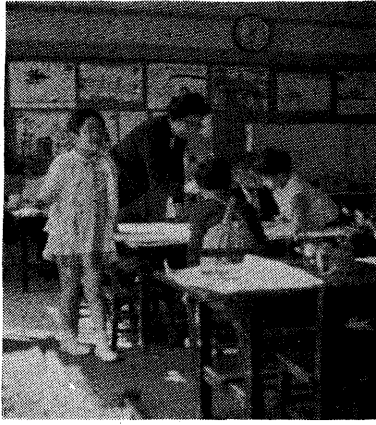
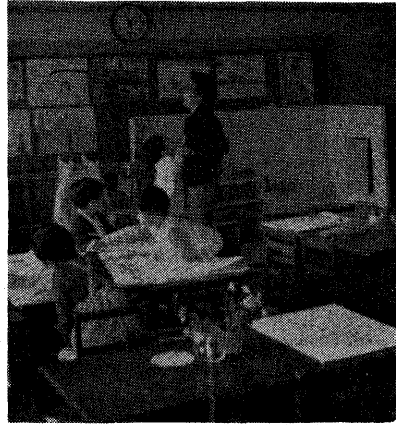
⑱上の本をとり

来た友だちと出て行き、E子一人のこりま  
す。E子はもう一度レコードをかけ、今度は  
指を動かしピアノを弾くまねをします。  
くり返し三度レコードをかけました。(写  
真⑬)

そして近くのテーブルでお絵かきの世話  
をしていた先生にむかって「先生、あたし  
これきいていると悲しくなっちゃうの」  
(写真⑭)といました。先生は「あらそ  
う、いい音楽じゃない」E子「あたしのお  
友だちが弾けるから。それでタンタララ  
・タン タン タンも弾けるの」とクシコ  
スポストを口ずさむ。レコードが終わると  
「もうよそおっと」といってE子はコード  
をさしこみから引き抜きレコードをかたづ  
け、隣のピアノの椅子にすわり、上にあつ  
た本をとり、ひらきました。(写真⑰)

K子が来て、二人でピアノを弾きます。  
(写真⑱) また一人になったE子のかんた  
んな曲を一、二曲弾いてピアノのふたを閉  
じて、絵を描いている幼児たちの方へ行き  
ます。「〇〇先生来て」といってE子はまた

⑮ 「せんせいこうやって」



⑯ 歌を口ずさみながら

ピアノの所へもどり、ハ長調長音階を一度弾き、また絵のグループの近くへきます。そばにいた先生の両手をにぎり、「先生こうやって」といって高く飛んでみせます。(写真⑮)

それから、黒板にかいてある「ホットケーキ」の歌を口ずさみます。(写真⑯)

外から、はずんだ幼児の声が先生をむかえにきます。それにつられてE子もなんとなく外へ出てみます。E子はやっとな音楽の世界から今、外の砂場の遊びに入ろうとしております。

それでは、幼児の音楽体験と創造的表現とは、どのようなものなのでしょう。この辺でまとめてみたいと思います。

① 感ずる まず、音楽の分野に属する歌、曲、リズム、そしてそれらを奏でる楽器の存在に幼児が気づくことから音楽体験は始まります。楽器をみたら、さわってみたい、音を出してみたいと思ひ、楽しい歌、美しい曲、軽やかなリズムを耳にしたら、「あー、楽しそうだなあ」「きれいだなあ」「自分もリズムにのって動いてみたい」と、感ずることから始まります。これは環境条件が整っていれば、つまり、幼児がこれらの音楽的要素に触れさえすれば感ずる心は本来もっているものだと思います。この段階では感ずるためのよき材料があり、幼児がそれらに数多く触れることが大切なようです。

② 楽しむ このように音楽的要素に慣れ親しみながら、幼児は同時にそれを楽しむようになってゆきます。音楽的要素は次第に幼児の生活に入りこんでゆき楽しい経験のひとつになってゆきます。音楽リズムの時間の指導も、幼児に音や曲やリズムに親しませながら、幼児の情感を育み、それを表現することを教えている。という点にひとつの意義を見いだせるのではないかと思うのです。そのために指導では、幼児に物理的、精神的な不安を与えず、よき材料、環境を施すことが必要で、それらの条件がそろって、幼児は

集団として楽しい経験をする事ができるのでしょう。ここで集団といいましたのは、幼児は楽しむ段階でいつも友だちを求めており、いっしょに楽しもうとするからです。このような集団としての楽しい経験の中で、お互いの人間関係はより緩和され、他を受け入れやすい態度が幼児にみられます。けれど、この楽しんでいる段階では、外からの保護が必要で、それが欠けると楽しい経験も生まれてこないことになってしまいます。

③感動 感ずるということは感動の始まりかもしれませんが、ここでは幼児の心に影響を与えた感動として考えてゆきたいと思います。音や曲やリズムを楽しんでいるうちに、何かが深く幼児の胸に入ってゆくことがあります。幼児は心から(きれいだなあ)、(楽しそうだなあ)、(何となく悲しい)と思うでしょう。このとき幼児は感動したのです。幼児の胸の中におこった感動は、今度は外へむかうエネルギーとなって次第に高まってゆきます。何とかして、自分の今の気持ちを表わしてみたい、このエネルギーを発散させてみたい。こんな所から創造力は生まれてくるのではないでしょうか。

「人間の最も大きなよろこびは、自己のうちに内在する情感を、感覚によって他覚的に感知しうる客観的な実体として表わすところにある」と野村健二氏はいっております。

④表現 幼児の心にわき出たエネルギーは、何か形として表現してみたい、という気持ちを生み、はじめて感動は形をとって、

もう一度幼児の心から姿を表わしてきます。それは、おとなの場合でしたら、絵になり、詩になり、文章になり、そして音楽になっていることでしょう。けれど未発達、未熟な幼児の場合には身体を動かすことによって表われました。感動する心から生まれた形は客観的にもうひとつ別の心をも感動させるものはなかったけれど、心を打たれた真剣な表情を私たちは見逃がすことはできません。

このような幼児の体験は全く一人のもので、周囲や友だちを意識はしません。友だちから誘いをかけられても拒み、個人の自由意志で行動するのは、幼児がそこに自分自身の個性、つまり自己を感じ、その喜びを味わっているからだと思うのです。この状態で幼児は自己実現の過程として、表現するための創意くふうをしており、幼いなりに創造的な問題解決をしております。ここに表わされたものこそ創造的表現の名にふさわしいものように思えるのです。ここで大切なことは幼児が音楽的価値をいかに深く受容できるかであると思います。

同じものでもいかに深く感動できるかということです。より深く感動することによって、より深い表現―創造性―が生まれ、幼児はそれだけ深い喜びを味わうことができるでしょう。そのためにさらに深い感動を知り、よりよい表現方法を知ることが、幼児の情操教育に大切な役割を果たすのではないかと思えます。

(お茶の水女子大学)